CS6-5〔I〕　災害時の復旧、救援に関するボランティア活動について
- 雲仙普賢岳噴火災害を例として-

金沢大学工学部　正会員　宮島昌克
金沢大学工学部　正会員　北浦　勝
金沢工業大学　　正会員　鈴木　有

１．はじめに

大震時などの大規模な災害においては行政側の対応には限界があるので、被害を軽減し迅速な復旧を行うためには、災害時のボランティアの活躍に期待するところが大きい。1989年にサンフランシスコを襲ったロマ・プリエタ地震では、被災直後からボランティアの活躍で、復旧・救援活動が大いにはかどった。また、1990年11月に噴火して以来、１年以上に渡って活発な活動を続けている雲仙普賢岳の噴火災害においても、多くのボランティアが活躍している。

そこで本研究では、1991年９月30日から10月４日の５日間にわたり、島原市および深江町において現地調査を行って収集した資料を基に、雲仙普賢岳噴火災害におけるボランティア活動の実態を把握するとともに、その問題点を抽出し、今後の災害時のボランティアの活用のための方策について検討する。

２．ボランティア活動の実態と問題点

島原市および深江町において、地元のボランティア団体の代表者に対して面接聞き取り調査を行った。聞き取り調査から得られた活動内容と、新聞報道などから得られた活動内容をまとめると、表１のようになる。ここでは、活動内容を専門知識や特殊技能を要する専門作業活動と、それらを要しない一般作業活動に分類して示した。聞き取り調査によれば、全国から送られてきた救援物資の仕分け作業が行政機関だけではとても追いつかずに、多くのボランティアが協力したとのことであった。また、窓口機能を果たした雲仙岳災害ボランティア協議会は、地元民を元気づけようと遠方から来る、イベントを目的としたボランティアの人たちのためのイベントの準備に追われることが多かったとのことであった。

このように長期化する災害の中で、いくつかの問題点が明かとなってきた。それらについて以下に述べる。まず第１に、救援物資の仕分け作業に多くの労力が割かれ、被災者の方に直接的な奉仕活動をあまり行えなかったという点である。これは、救援物資が集中豪雨的に全国から送られてきたことの他に、品物の種類が偏ったり、あまり必要とされないものに対しても仕分けをしなければならなかったり、と送り方に問題のある場合も少なくなかったようである。救援物資については、多くの品物が流通機構を無視した形で多量に入ってきたので、地元の流通機構を破壊し、経済を沈滞させてしまったという弊害を一方では生んでいる。前述したように、仕分け作業とイベントの準備、実施に活動内容が偏ってしまったという感が強い。

第２に、行政機関との役割分担の問題が挙げられる。今回は、救援物資の仕分け作業を行政機関の指導の下で行っている。しかし、危険を伴う作業などの場合の、事故が起こったときの補償の問題とも絡んで、行政との連携は十分に行えない状況にある。したがって、現状ではボランティア活動は行政とは全く独立して存在している形となっている。このことが、行政からの連絡の遅れなどとなって現れ、応急対応の遅れに結び付いている部分も見られる。また、災害時のボランティア活動の経験のない人たちばかりの集まりであることから、応急対応に手間取ることもあったようである。

第３に、今回の災害がこれまでの地震災害や風水害と大きく異なり、非常に長期化していることによる問題点も明らかになってきている。すなわち、いつ終息するかわからないので計画的な活動を行えなかったという点である。活動資金の不足と相まって活動を中止しなければならなくなったケースも少なからず見られた。このような問題点を整理したものを図１に示す。

表１　災害ボランティアの主な活動内容

	内　　容
一般作業	救援物資の仕分け作業、避難民の住宅捜し、機械によるマッサージ、イベントの企画、実施、炊出し（おにぎり、うどん、そうめん）、清掃
専門作業	土石流、火砕流の警戒、監視、健康診断、健康相談、マッサージ、家庭教師、アマチュア無線ネットワーク

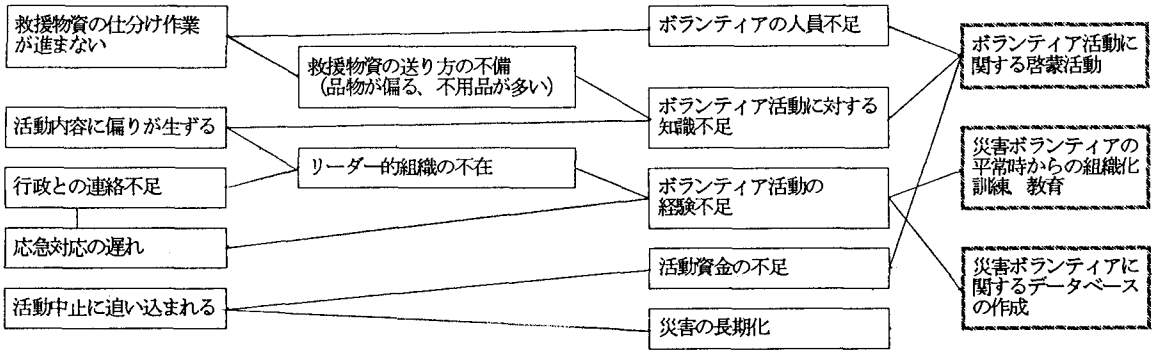

図１　災害時のボランティア活動における問題点と今後の課題

３．ボランティア活動における問題点と今後の課題

図１は、前章で明らかにされた問題点に対する今後の課題も示している。すなわち、ボランティアの人員不足、救援物資の送り方の不備にみられるようなボランティア活動に対する知識不足、活動資金の不足、などに対しては、啓蒙活動を活発に行い一般市民のボランティア活動に対する認識を高める必要がある。一方、大災害の起こる頻度は幸いなことに大きくないので、ボランティア活動の経験不足を補うためには、ボランティア活動の経験を場所および時間を越えて蓄積することのできる、データベースの作成が欠くべからざるものだと考えられる。また、災害時には訓練、教育を受けたリーダーの存在が重要な機能を果たすので、平常時から災害ボランティアを組織し、訓練、教育を行っておくことが重要である。ロマ・プリエタ地震における災害ボランティアを例に考えると、日本赤十字社がこの任を果たすのが適当であると思われる。

４．おわりに

雲仙普賢岳の噴火災害を例にとり、災害ボランティアのあり方について検討した。わが国におけるこれまでの各種災害において行われたボランティア活動の検討や、一般的なボランティア活動と災害時のボランティア活動の連携などについてさらに考察していく予定である。

本研究が文部省科学研究費重点領域研究(2)（研究代表者　北浦　勝、課題番号03201213）の補助によって行われたことを記して感謝いたします。また、現地調査および資料整理に協力して下さいました、金沢大学工学部技官　池本敏和氏、福井工業高等専門学校助手　吉田雅穂氏に感謝します。

最後に、災害のさなかに調査に訪れたのにも関わらず、懇切丁寧に調査に協力して下さいました島原市および深江町の皆様に心からお礼申し上げるとともに、雲仙普賢岳の１日も早い鎮静を祈ります。